

四、後藤謙太郎

— 詩 —

熊本の人、酒を好み、愛犬を友に、全國を宣傳行脚した人、放浪詩人とも云はれ、多くの詩を作つた。大正十一年の軍隊宣傳で下獄、大正十四年一月二十日集鴨服役中自殺した。在京の同志に知らせられず、獄吏の手で共同墓地に埋められた事を不審とし、掘り起して慶應病院で解剖して見たが、やはり自殺であつた。

大阪では同君の『勞働、監獄、放浪の歌』が出版されてゐる。

▽採炭夫の歌

底だ、底、底、ごん底だ、
この世の底だ、ごん底だ。
もしも提防が崩えたなら
ガスがバクハツしたならば

水攻め、火攻め、その上に
天井がくえたら生き埋めだ。

底の底なるごん底に、
この世の地獄のごん底に
俺は炭堀る採炭夫。

飽食暖衣のブルジュアの
社會組織が見憎けりや
どうせ命も名譽をも
棄てたはだかの採炭夫
腕にや覺えたツルがある。

汚れた世界の果までも
赤い血潮で染めてやる。

▽ 闇

夜でも晝でも眞暗だ

工場はいつも眞暗だ

おい等の世界は眞暗だ

おい等の思ひも眞暗だ。

冷たい石の地下室で

冷たい機械に向う時

冷たい心で向う時

冷たい伍長の眼が光る。

工場に行くにも眞暗だ

家に歸へるも眞暗だ

家でも部屋は眞暗だ

どうせこの世は眞暗だ。

冷たい夜の歸り路に

冷たい道の舗石で

冷たい奴の喉下を

冷たい刃で刺してやる。

▽ アサギのナツパ

朝から晩までアサギのナツパ

飯を喰ふにもこのナツパ

未決囚徒が着るよな色の

アサギのナツパは俺等の着物

さうせ俺等も囚人だ、
賃金鐵鎖の囚人が、
工場で死ぬる囚人だ、
ナツバ着たまゝ死ぬる身だ。

死ぬなら一層絞首臺

霜置く朝の絞首臺

もしも日の出が見えたなら
笑顔のまゝで死んでやる。

死んだ死體のその上に

若い男女が手を取つて

踏んだりはねたりせうとても
なんて嘆かうアサギのナツバ

——(門司セメント時代)——

五、村木源次郎

——詩——

村木君は、もと横濱のクリスチャン、後、社會運動に入り、明治四十一年の赤旗事件で、堺、山川
荒畑、百瀬其他の諸君と共に獄に下つた。大逆事件以後は主に大杉の家に起居し、大正十三年九月
福田大將事件で數十名の警官決死隊の手に捕はれ、翌年一月廿三日市ヶ谷から假死状態で責付出獄、
翌廿四日労働運動社での死に至るまで同社の同人であつた。病身なるまゝつとめて同志の世話方を
勤めた。『ヒサイタチャン』は天城山猫ヶ峠の寒椿の下で凍死した久板卯之助君の死に顔を見に行
つた彼がマコに送つたもの『監獄通ひ』は常に同志への差し入れに市ヶ谷通ひをしてゐた彼の感想、
最後の『マコよ』は大杉死後の彼の苦悶。

▽ ヒサイタチャン

コノヤマノオクノオクノ

オクヤママデ

ヒサイタオヂチャン

ネテイマス。

オテテラムネニ

チヤントオキ、

雪ヲヒトネニ

ワライガボ。

カヘラナイカト

キイタラバ、

静カデイイヨト

イヒマシタ。

▽監獄通ひ

夏のお日様かんく

照らす。

僕の友達ミケツと云つて

赤い煉瓦のお家の中で

獨り靜かにご本を読むよ

夏のお日様かんく

照らす。

僕は汗だく埃にまみれ

赤い煉瓦のお家をさして

一人よぼ／＼ご本を運ぶ

夏のお日様かんく

照らす。

▽マコよ

マコよ獨りて泣くのはおよし、

僕も一緒に泣かしておくれ。

パパに好く似た大きなお目に、

露を宿して歔歔く時は、
僕も一緒に泣かしておくれ。

パパとママとが歸らぬ事を、
僕が寢床で話したをりも、
マコよ、お前は頷くばかり、
涙見せない可憐いさまに、
僕は腸絶つ思ひ。

パパのよく云つた戯言に、
俺が死んでも

ゲンニイ居れば

マコは安心

大きくなる、と、

マコよ、今日から好い小父様が、

パパの代りにお前と遊ぶ。

マコよ獨りて泣くのはおよし、

小さいお胸に大きな腦み、

秘めて愛ひの子にならぬよう、

僕も一緒に泣かしておくれ。

六、古田 大次郎

—— 遺稿 ——

六、古田大次郎

——詩、感想——

古田君は、豊かな幸福な家庭に育つた、アナキスト仲間としてはめづらしい人であつた。中濱、小西、河合、其他の諸君と共に大阪ギロチン社の一員、大阪銀行員殺しの下手人であつたが、事件後一ヶ年同逃げ延び、その間に、福田大將事件に連座、村木君と共に捕はれて死刑になつた。獄中記『死の懺悔』が死後出版された。

『死の懺悔』から

赤い煉瓦にかこまれた

淋しい庭にも秋は來た。

コスモスの花菊の花

みんなきれいに咲き出した。

x

お家の屋根で白鳩が

クウクウクウと啼きました。

高いみ空にあたゝかな

陽は輝いて夢のやう。

澁谷のお家でミーちゃんが

小春日の椽に猫抱いて

遊んでる様が眼に浮ぶ。

x

花の散るのがこれ程心を悲しませるとは思はなかつた。僕は花を見なければよかつたと思ふ。菜の花はまだ盛りだが、さうせ一度は散るのだらう。それを考へると、見るに忍びない。又、この悲しみを繰り返さなければならぬだらうか。菜の花の散る時に。あれ程快く感じた若葉さへ、今の僕には淋しいものに思はれる。鳩にも雀にもまだ近づけない。(四・二九)

x

『死刑の宣告を聞きにゆく日。』

實文集の「逆徒の死生観」を見ると、誰かが、手紙にかう書いてゐる。僕も、その文句を眞似て見たくなつたのだ。

九月十日！

去年の今日、朝早く、寢込みを襲はれて村木君と僕は、他愛なく警視廳に擧げられて終つたのだ。

早いもので、もう一年経つた。因縁の深い今日、刑の宣告を承はりに、さア出掛けるとしようかな。

畜生！ 變に氣がソワソワして、まるで試験發表を見に行く中學生のやうだ。及第は解つてるが見ない中は安心出来ない。九月十日（曇）

豫ての覺悟だつたから、宣告を聞いた後も、怖ろしい事も淋しい事もない。實に靜かな氣持だ。靜かだけれど、呆とした灰色の、夢の中にひたつてるやうな氣がする。世間が、世界が、急にうすぼんやりして來た。

しかし、判決が思ひ通りだつた所爲か、大變愉快だ。僕は今迄で、死刑を他の人にも觸れてゐ

たのだから、若しさうならなかつたら、嘘をついたやうで恥づかしくなるし、緊張した氣分が弛んで來るし、大變な、詰らない事になつて終ふ。それが思ひ通りになつたのだから、威張る譯ではないが心が踊りを踊つてるやうで、嬉しくてならない。

夢のやうな氣持も、今は大分ハッキリして來た。

△うの日